

国家試験および就職活動に向けた学習および生活変容の取り組み

計良倫子, 本間和代

明倫短期大学 歯科衛生士学科

Changes of Learning Behavior for the National Examination and Employment

Tomoko Kera, Kazuyo Honma

Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

本学歯科衛生士学科では、3年生の前期より国家試験に向けた模擬試験や講義を実施している。平成25・26年度卒業生を対象に、国家試験の合格およびその後の進学・就職に対しての生活変容の計画・実施、計画の取り組み方法とその効果について自己評価を試み、その結果と国家試験合格率との関係について調べ両者を比較した。

その結果、知識面における自己観察は25・26年度生共に「知識が不足している」が各々94.8%、53.2%、技術面は、25年度生は「歯科予防処置分野が弱い」が29.3%、26年度生は「技術全般に弱い」が41.9%と最も多かった。コミュニケーション能力は、25年度生は「場に応じた会話ができない」が32.1%、26年度生は「問題がない」が50.0%、礼儀作法は、25年度生は「敬語が正しく使えない」が35.7%、26年度生は「問題がない」が50.0%と最も多かった。医療従事者としての心構えは、25年度生は「危機感がない」が40.0%、26年度生は「心構えが出来ている」が63.9%と最も多かった。生活変容の目標は、両者共に「国家試験合格」が最も多く、各々31.6%、30.6%、取り組み時期では、25年度生は11月が27.8%で、26年度生12月が27.7%と最も多かった。取り組み方法は、両者共に「勉強の実践」が最も多く、各々75.0%、72.7%であった。取り組みに対しては25・26年度生共に「良かった」が最も多く、各々55.4%、73.8%であった。

本研究から、国家試験等に向けた学生の自己観察・生活変容の取り組みに対する自己評価と、国家試験合格率の関連性が見られた。今後は、臨地・臨床実習と国家試験および就職を学生自身が結び付けて考えていけるよう、講義・実習の連結にさらに力を入れていくと同時に、早期から国家試験対策を実施していくことも必要であると考えられる。

キーワード：国家試験 就職 生活変容

Keywords: National Examination, Employment, Life Change

I. はじめに

本学歯科衛生士学科では、国家試験に向けた学習意識の向上を目的として3年の前期より模擬試験や講義を実施しているが、本格的に集中して学習のまとめを始めるのは、2年後期から3年前期に亘る、臨地・臨床実習終了後の10月からである。またそれと並行して、3年前期より進学・就職に向けての進路指導も開始される。

その中で、模擬試験の結果や日々の生活態度等を見ていくと、学生の国家試験に対する意識や心構え

に個人差が感じられる。また、進学・就職活動においても、積極的に取り組む学生が、必ずしも模擬試験でよい成績を上げているとは限らず、進学・就職に対してもそれぞれ意識の違いが伺える。

本学学生の最終目標は国家試験に合格し、進学または就職することである。そのため、学校生活の完結期であるこの時期は、生活変容による自己啓発が重要であると考えられる。そこで今回、国家試験対策や就職活動等を開始した学生らが、その時点で自分の現状をどう把握しているか、また、自分の目標およびその目標達成のためにどのような生活変容が必要

であると考えているか、さらに、立案した目標・計画の実施とその取り組み方法や効果について自己評価を試みた。その後、生活変容および目標到達度と国家試験合格率等の関係について調査し、今後の指導に役立てることを目的とした。

II. 対象および方法

対象は、本学歯科衛生士学科3年のうち、本研究に同意を得られた、平成25年度卒業生女子56名(21.0±0.1歳)と、平成26年度卒業生女子62名(21.2±1.3歳)である。各年度生が臨地・臨床実習を終了した平成25年および26年10月に、生活変容を目的とした自己観察、自己診断、生活変容の計画立案について、また、国家試験終了後の平成26年および27年3月に、生活変容への取り組み、結果の評価および目標到達度について、自由記載によるアンケートを行った。自己観察では、知識、技術、コミュニケーション能力、礼儀作法、医療従事者としての心構え(複数回答)等についての情報収集、自己診断では自己観察から抽出した問題点の明確化、計画立案では取り組むべき内容の優先順位、目標設定、取り組み方法、生活変容への取り組みでは、時期および内容、評価では、取り組みの良否、実施後の自己の変化について調べた。また、自己の目標到達度については、5段階評価(1:全くできなかった, 2:あまりできなかった, 3:どちらともいえない, 4:かなりできた, 5:十分にできた)を行った。さらに、目標到達度と国家試験合格率について両者を比較した。

III. 結果

1. 自己観察

知識面における自己観察は、図1のとおり、「基礎知識が不足している」が25年度生では94.8%、26年度生では53.2%と最も多く、25年度生の方が26年度生に比べ41.6%多かった。「苦手分野がある」

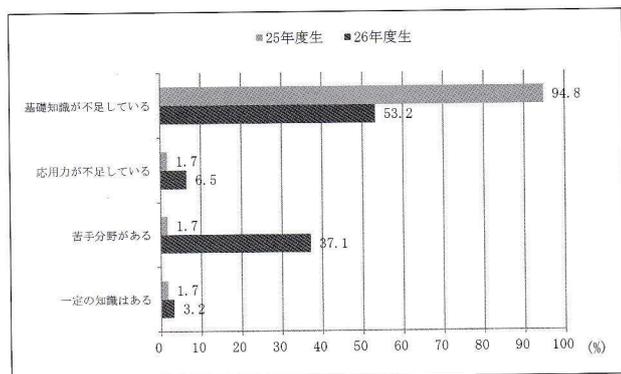


図1 25・26年度生の知識面に対する自己観察の比較

は、25年度生が1.7%と少ないのに対し、26年度生では37.1%と35.4%多かった。

技術面については、図2のとおり、25年度生は「歯科予防処置分野が弱い」が29.3%と最も多く、次いで「臨機応変に動けない」が27.6%、「歯科診療補助分野が弱い」が19.0%と続いた。しかし、26年度生では「技術全般に弱い」が41.9%と最も多く、次いで「できるできないに差がある」が17.7%、「歯科予防処置分野が弱い」が14.5%であった。25年度生は比較的具体的な観察が多いが、26年度生は技術全般に亘る観察が多かった。

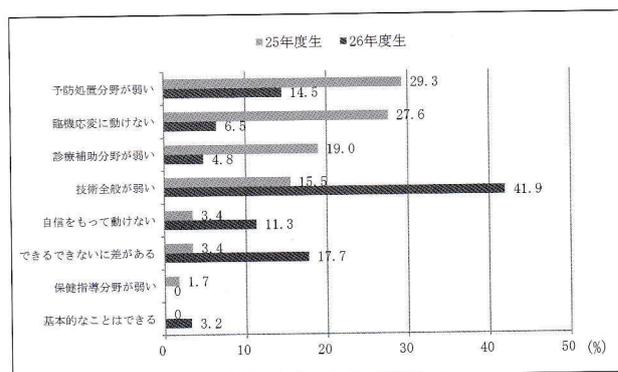


図2 25・26年度生の技術面に対する自己観察の比較

コミュニケーション能力については、図3のとおり、25年度生は「場に応じた会話ができない」が最も多く32.1%、次いで「人見知りで会話が続かない」が30.4%、「コミュニケーションに問題はない」が21.4%であった。26年度生では「コミュニケーションに問題はない」が46.8%と最も多く、次いで「コミュニケーションに自信がない」が19.4%、「人見知りで会話が続かない」が16.1%であった。コミュニケーションに問題はないと思っている者が、26年度生の方が25.4%多い結果となった。

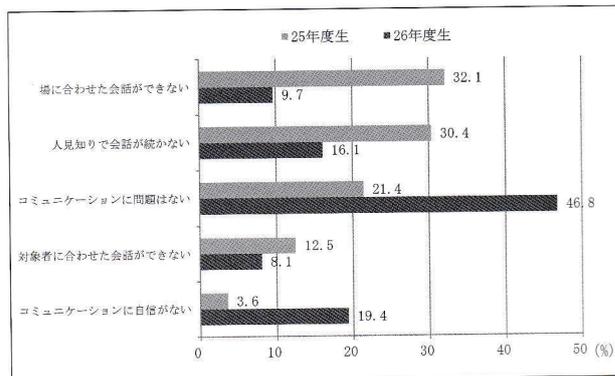


図3 25・26年度生のコミュニケーション能力に対する自己観察の比較

礼儀作法については、図4のとおり、25年度生は「敬語が正しく使えない」が35.7%と最も多く、次いで「言葉遣いが悪い」が19.6%、「マナー不足」が17.9%であった。26年度生では「問題がない」が50.0%と最も多く、次いで「言葉遣いが悪い」が20.0%「マナー不足」が11.7%であった。礼儀作法においても、26年度生の方が自信のある回答が多かった。

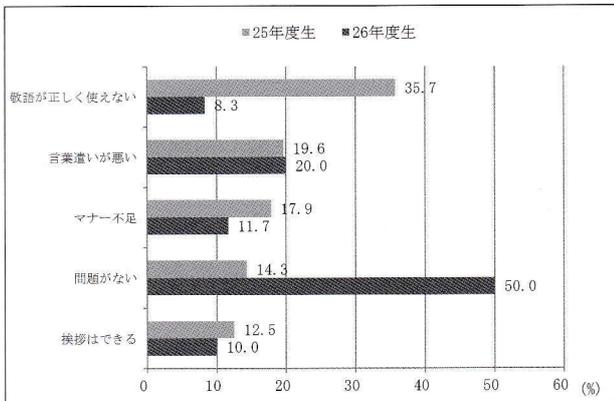


図4 25・26年度生の礼儀作法に対する自己観察の比較

医療従事者としての心構えについては、図5のとおり、25年度生は「危機感がない」が40.0%と最も多く、次いで「歯科衛生士になる実感がわかない」が18.2%、「清潔・不潔の観念が不足している」が16.4%であった。26年度生では、「心構えが出来ている」が63.9%と最も多く、次いで「心構えが出来ていない」が14.8%「清潔・不潔の観念が不足している」が11.5%であった。医療従事者としての心構えにおいても、26年度生の方が自信のある回答が多かった。

以上より、自己観察の項目の多くにおいて、両者の類似性は見られなかった。

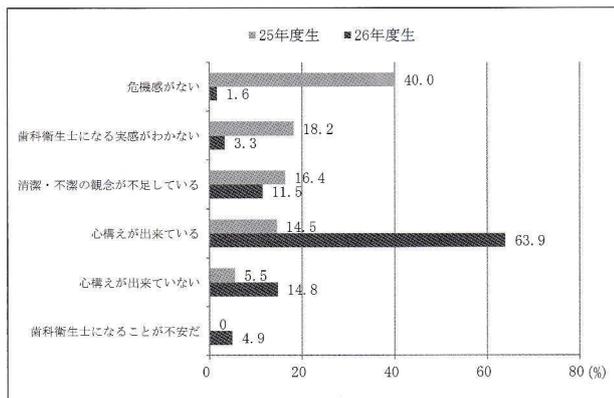


図5 25・26年度生の医療従事者としての心構えに対する自己観察の比較

2. 自己診断

問題点を明確化する自己診断では、25・26年度生共に「学力不足」が最も多く各々52.7%、53.6%であった。次いで「技術不足」が22.6%、23.7%で、両者共似た傾向にあった。

3. 計画立案

国家試験等に向けての生活変容の優先順位では、図6のとおり、25年度生が「基礎知識を身につける」が75.9%と最も多く、次いで「生活態度を改める」が8.6%、「学習計画を立てる」「苦手分野を克服する」が5.2%であった。26年度生は、「基礎知識を身につける」が64.5%と最も多く、次いで「苦手分野を克服する」が14.5%「生活態度を改める」が8.1%であった。両者共、多くの者が基礎知識を身につけることを優先順位の1番に挙げていた。

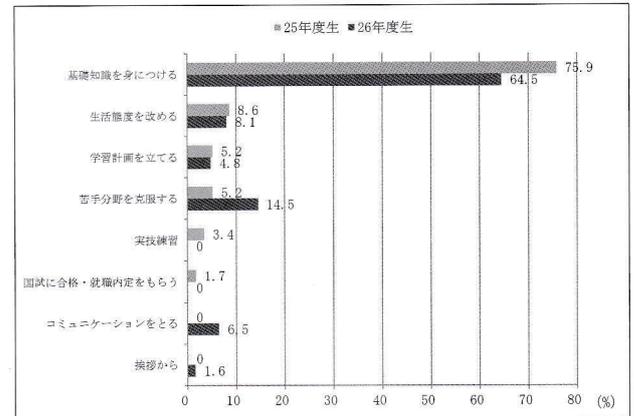


図6 25・26年度生の計画立案における優先順位の比較

目標設定は、図7のとおり、25年度生が「国家試験合格」が31.6%と最も多く、次いで「基本的な生活習慣の確立」が21.1%「技術力の向上」が19.3%であった。26年度生は「国家試験合格」と「知識の向上」が30.6%と最も多く、次いで「歯科衛生士

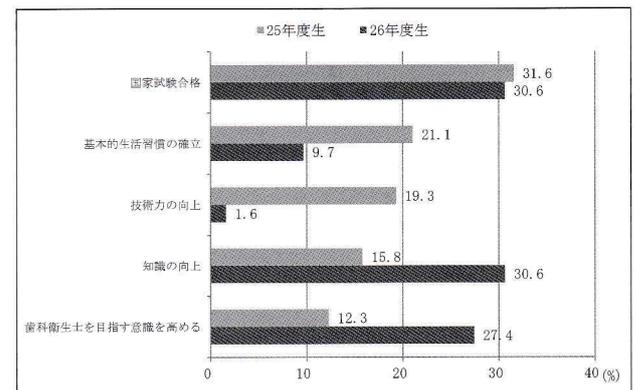


図7 25・26年度生の計画立案における目標設定の比較

を目指す意識を高める」が27.4%であった。「国家試験合格」の目標は一致しているものの、25年度生は「基本的な生活習慣の確立」を挙げた者が多いのに対し、26年度生は「知識の向上」を挙げた者が多かった。また、「歯科衛生士を目指す意識を高める」でも26年度生の方が多かった。

取り組み方法では、25・26年度生共に「勉強の実践」が最も多く、各々75.0%、72.7%、次いで「気持ちの入替」が13.2%、20.8%、「実技練習」が8.8%、5.2%で概ね共通していた。

4. 生活変容への取り組み

生活変容の取り組みの時期は、図8のとおり、25年度生は11月が27.8%と最も多く、次いで12月・1月が22.2%であった。26年度生は、12月が27.7%と最も多く、次いで11月・1月が17.0%であった。26年度生が少数ではあるが、比較的早い時期を挙げているのに比べ、25年度生は遅い傾向にあった。

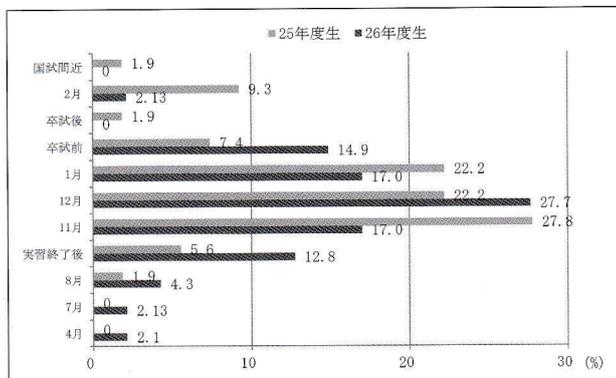


図8 25・26年度生の生活変容の取り組み時期の比較

取り組み内容では、図9のとおり、25年度生は「主要3科目（歯科予防処置、歯科診療補助、歯科保健指導）中心」が26.3%と最も多く、次いで「国家試験過去問題の実施」が19.3%、「模擬試験の復習」

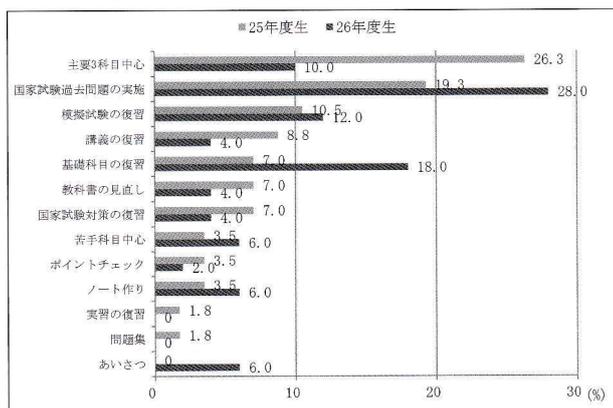


図9 25・26年度生の取り組み内容の比較

が10.5%であった。26年度生は、「国家試験過去問題」が28.0%と最も多く、次いで「基礎科目の復習」が18.0%、「模擬試験の復習」が12.0%であった。

5. 評価

取り組み方に対する評価では、25・26年度生共に「良かった」が最も多く、それぞれ55.4%、73.8%であった。次いで25年度生は「もっと早く始めるべきであった」が17.9%「良くなかった」が14.3%、26年度生は「もっと早く始めるべきであった」「良くなかった」が14.0%であった。25年度生において「もっと早く始めるべきであった」が多かったのは、開始時期の計画と連動した回答であった。

実施結果では、25・26年度生共に「以前より知識が身についた」が最も多く、それぞれ28.6%、40.3%、次いで、25年度生は「模擬試験結果が上昇した」が19.6%、「学習習慣が確立した」が17.9%、26年度生は、「模擬試験結果の上昇した」が22.6%、「自分に自信がついた」が11.3%であった。

6. 自己到達度

25年度生は、自己到達度「3：どちらともいえない」が46.0%と最も多く、次いで「4：かなりできた」が34.0%、「2：あまり出来なかった」が16.0%であった。26年度生は、「4：かなりできた」が45.2%と最も多く、ついで「3：どちらともいえない」が40.3%「2：あまり出来なかった」が8.1%で、25年度生に比べ到達度の高い者が多かった。

IV. 考察

知識についての自己観察から、25年度生は漠然と基礎知識が足りていないと感じている学生が多いが、26年度生は、自分が苦手とする分野を把握していることが伺える。また、技術については、25年度生が歯科予防処置、歯科診療補助、歯科保健指導の歯科衛生士業務に関係する主要3科目が苦手である、と具体的な科目名を挙げているのに対し、26年度生は科目に限らず技術全般に不安を感じていることが伺える。これより、技術を身につけるためには、基礎となる知識が必要であると思われることから、25年度生の取り組み方法として、主要3科目が多く挙げられたと考えられる。また、26年度生は、国家試験過去問題を多く解きながら、各自の苦手分野を把握した上で、基礎に立ち返った学習に力を入れたと思われる。

さらに、25年度生は、臨地・臨床実習後にも関わらず、礼儀作法やコミュニケーションに対して自

信がなく、歯科衛生士としての心構えが確立していない者が多いが、26年度生は、半数以上が礼儀作法やコミュニケーションに問題を感じておらず、将来、歯科衛生士として社会へ出るといふ、就職活動に対しての心構えがきちんとできている、と思っ

ている様子が伺える。これより、両年者の取り組み開始時期に違いがでたものと考えられる。26年度生は、25年度よりも早く目標に対して取り組みを開始しており、25年度生には見られなかった、4月や7月といった3学年初期より開始している者もいた。両者の国家試験合格率が、25年度生が89.5%、26年度生が97.0%と7.5%の差が出たのは、26年度生の多くが、将来の就職に対しての心構えや意識を高く抱き、早くから各自の目標に対して取り組みを開始していた結果であると考えられる。臨地・臨床実習で様々な実習先に赴き、多くの医療従事者から知識・技術・態度等を学んだことが、学生の意識改革につながったものと思われる。今後は、臨地・臨床実習と国家試験および就職へのつながりを学生自身が結び付けて考えていけるよう、講義と実習の連結にさらに力を入れていく必要があると考える。

計画に対する取り組みは、25年度生の約50%が良かったと答えたが、「集中できなかった」や「勉強時間を増やすべきだった」と答えた者もいた。しかし、目標の到達度が「1：全く出来なかった」の者はおらず、自分の掲げた目標に対しては到達したと感じていることが伺える。それに対して26年度生は、70%以上の者が良かったと答えているが、目標到達度が「1：全く出来なかった」と答えた者

が1.6%いた。しかし、合格率は26年度生の方が高く、「国家試験合格」という目標に対しての到達では合格率から26年度生のほうが達成したと言える。また、25年度生よりも26年度生のほうが、自分の掲げた目標の到達度に対して、満足している反面、各自について細かく厳しく分析していることが伺える。これらの違いが合格率の差に出たものと考えられる。

V. 結 論

歯科衛生士学科平成25年度および26年度卒業生の国家試験および就職に向けての自己観察による学習および生活変容のための取り組みの結果、次の結論を得た。

1. 知識面および技術面における自己観察は、26年度生は「苦手分野がある」「技術全般が弱い」など、学習全般に対する観察が多かった。
2. コミュニケーション能力や礼儀作法における自己観察は、26年度生は「問題がない」「心構えが出来ている」など自信ある回答が多かった。
3. 取り組みに対する自己到達度が高かった者は26年度生に多く、国家試験の合格率も97.0%で、25年度生の89.5%よりも高かった。

文 献

- 1) 全国歯科衛生士教育協議会：よくわかる歯科衛生過程。医歯薬出版、東京、2015
- 2) 佐藤陽子、齋藤淳他：歯科衛生ケアプロセス。医師薬出版、東京、2007